

福聚山史

文池浦泰憲

前回は、思いがけず発見された手紙と

史料から、かつて常圓寺の祖師像・祖師堂を題とした「感應胎籠祖師堂之由来」という浪曲がつくられ、昭和十一年七月十七日の施餓鬼法要にて披露されていたことを明らかにした。この新作浪曲は「菊香堂錦升」（岡山丘）という人によつて創作されたものであったが、このことは戦後、昭和三十五年にこの人によつて伝えられたのであった。

○「コンパスと烏口を使った日本初の

「見つかる」

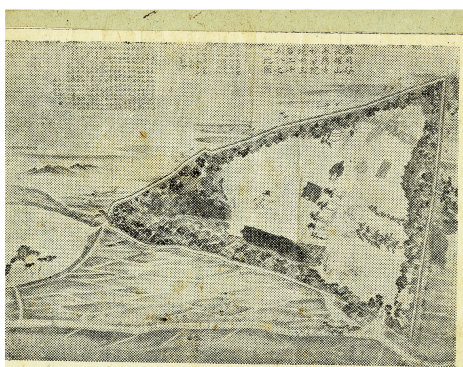
この時、錦升氏より新たに書き直された浪曲の台本とともに、常圓寺に伝えられたものももう一つあった。それは新聞の切り抜きで、「コンパスと烏口からすくちを使つた日本初の圖ずはこれ 製圖家秋田氏が將軍の祈願所を描いたもの 柏木常圓寺から出る」との見出しの記事である。

錦升氏によれば、この記事は昭和十一年（一九三六）七月十三日付の時事新報という新聞に掲載されたものというが、記事の冒頭には、

日本で最初の「コンパスと烏口」を使用した天保十一年十一月の昔に書いた略圖が淀橋區柏木日蓮宗の常圓

寺と云ふお寺にあることが淀橋區柏木方面事務所を訪れた一老人の口から洩れた。

とある。この老人については、詳しく触れられていないので、まったく素性がわからないが、記事によるとこの「日本初の圖」は、天保年間、徳川十一代將軍家の齊公が日蓮宗の祈願所を作るために、今の目白の学習院のある辺りの場所に作ろうと計画した略図で、作成者は当時日本で有名な製図家「秋田十七郎」の作であるという。祈願所の建設に必要な木材、土地その他一切の準備が済み、工事着工となった時、上野寛永寺と芝増上寺から將軍家の祈願所が他にできることに對し



常圓寺からの新発見を伝える新聞記事（昭和11年7月13日）

コンパスと烏口を使つた
日本初の圖はこれ

國画家秋田氏が將軍の祈願所を描いたもの

て反対が起こり、工事が取りやめとなつてこの略図が「柏木の常圓寺の奥深く世に出ずに今日となつた」という。

○「鼠山感應寺」

さて、この徳川十一代将軍家齊が作ろうとした「日蓮宗の祈願所」とは、天保年間に八年という短期間存在し、幻の大寺院ともいわれる「鼠山感應寺」のことであろう。鼠山感應寺は、いうまでもなく、現在常圓寺に鎮座する祖師像が、元来祀られていたといわれる寺院である。

感應寺については、これまで『福聚山史』でふれてきたが、江戸初期の日蓮宗内における不受不施。受不施をめぐる対立の中で上野寛永寺のお預けとなつていた谷中感應寺の再興を鎌倉妙本寺、池上本門寺の貫首であつた日萬上人が発願し、將軍家に働きかけ建立された寺院であつた。同寺には將軍家斉が持仏としていた祖師像が祀られ、それが紆余曲折を経て常圓寺の祖師堂に祀られて

常圓寺の祖師
堂に祀られて
いるのである。
○秋田十七
郎とは

そして、この略図を作成したのは秋田十七郎という製図家であるという。そこで、この人物について調べ

てみると、秋田十七郎は、別名を津田宜義という江戸後期の和算家であるという。和算とは、日本古来の独自の数学で、明治以降、西洋数学が流入しその影響を受ける前、特に江戸時代に発達した学問である。

十七郎は、同じく和算家として有名な長谷川寛の高弟で、天保八年（一八三七）師とともに『算法地方大成』という書を刊行した。この書は「地方書」と呼ばれる分野の書物で、全五巻からなり、治水や農業の心得、検地、土木工事など、図入りで説明した手引書であつたが幕府から禁書とされた。その中には、土地の広さや地形を測量する方法、そのための器具の解説など、かなりの専門知識を駆使して書かれているが、このような専門知識の普及を嫌う幕府代官の意向によつて絶版とされたという。コンパスは、ご存じの通り円を描いたり、線分の長さを移したりする、今でも使われる文房具、製図器具である。

日本には十七世紀の初期に日本にもたらされ、「ぶんまわし」「円規」「渾発」（根発）と呼ばれていたという。十七郎と同時期に活躍した間宮林蔵や伊能忠敬らも竹製のコンパスを作り、地図製作に用いたという。「日本初の」という形容が正しいかどうか慎重に考える必要があるが、記事にしたがえば、この略図はこうした測量の専門家によって作成されたということである。

(次回に続く)